

# 松富かおりのへ世界と日本の安全保障⑪

## イスラエルとヒズボラ

### 中東はカオスと化するのか？

ジャーナリスト・元駐イスラエル大使夫人 松富かおり

2024年9月17日レバノン全土で3000もの小爆発が起こった。

ヒズボラ戦闘員が持つ3000個以上のポケベルが一斉に爆発。爆発は、翌日も続いた。ポケベルとトランシーバー。ヒズボラの戦闘員40人が死亡、3000人以上が負傷した。24日、ヒズボラは事実上の「戦争突入宣言」をし、イスラエル最大都市テルアビブに弾道ミサイルを発射。情報機関モサド本部を狙ったミサイルも打ち込んだが、イスラエルで大きな被害は出ていない。

一方、イスラエルはヒズボラの拠点100カ所以上を空爆。ペイルストでは幹部を狙ったピンポイント攻撃でヒズボラのほとんどの幹部を殺害。ついには27日、ヒズボラ指導者のナスララ師を狙った空爆を実施。翌日ナスララ師の死亡が確認された。バイデン大統領

は「何千人もの米国人、イスラエル人、レバノンの民間人がナスララ師の犠牲になった。正当な措置だ」と声明を発表。40年のヒズボラの恐怖政治で米国人以外にレバノン人も殺害されてきた。ネタニヤフ首相も国連演説で「ヒズボラを倒さねばならない」と組織の壊滅を狙う。この原稿が読まれるのは約ひと月後。細かい予測は困難だが、これまでのイスラエルの国防方針と中東の現状から、見えてくるものを書く。

イスラエルは基本的には敵国であるアラブの国々に囲まれた、人口1000万人弱の小国だ。領土は南北に細長く、防衛に向いているとは言えない。その国が建国以来、自国よりはるかに戦力の大きいアラブ連合などと戦い、連戦連勝してきたのだ。その戦略と歴史を知る事は日本にとっても有益だろう。

#### イスラエルは地上戦の訓練を開始

イスラエルの安全保障の3本柱は、1 抑止（歴史的な戦い全てで、相手に圧倒的に勝利。戦つても勝てないと思わせてきた）、2 素早い危険感知能力（優秀な情報収集機関モサド、世界に誇るサイバー部隊等）、3 短い期間での圧倒的な勝利（これは抑止に繋がり、かつ、戦争後も素早くイスラエル社会が通常運転に戻り、経済的、社会的ダメージを少なくできる）だ。

しかし、ハマスのテロにより始まったガザでの戦いは既に1年になり、イスラエル側のコストは軍事的にも社会的にも、経済的にも膨れ上がっている。国際的非難の高まりも大きく、無視できなくなりつつある。ハマスが新たな戦闘員をリクルート

し、息を吹き返しつつある兆候まで見える。なんらかの方針変更が必要だった。

この間、ヒズボラがイスラエルに打ち込んだロケットの数は7600発を超え、レバノン国境から3マイル（約4.8キロメートル）以内の住民約6万人は避難。今も、政府の予算でホテル等に分散し避難生活を続ける。ヒズボラはこの3マイルゾーンを射程内とし、事実上、人が住めない土地に変えてしまった。イスラエルはハマスの攻撃とほぼ同時にレバノン国境に3個師団を配置、ヒズボラの攻撃に備えた。少しでも遅れていれば、ヒズボラはハマスと同時に2方面から奇襲攻撃を行う可能性があった。その後、ナスララ師は方針を変え、毎日のようにロケットやドローン、対戦車ミサイルで攻撃し、イスラエルに2正面での戦いを強いてきた。ヒズボラは中東でも大きく、イランから高度な武器の供与を受ける強力な非国家武力組織だ。米戦略国際問題研究所によると12〜20万発のミサイルやロケット、ドローンを持ち、イラン製のミサイルはイスラエル最南部、紅海に臨む

美しいリゾート地エイラトをも射程範囲に収める。

日・米・欧など21カ国は25日、イスラエルとヒズボラに「合意を締結するためのあらゆる外交努力を全面支援する」として『21日間の即時停戦』を求める声明を出した。サウジアラビアやカタール、アラブ首長国連邦、豪州、カナダも名を連ねた。

司令官の多くを失い、通信手段として身につけていた携帯電話やポケベル、トランシーバー（爆破後の破片には日本企業が10年以上前に製造を中止した物も含まれていた）が、突如として破壊兵器に変わる恐怖を経験した戦闘員を抱えるヒズボラにとっては体勢を立て直す時間は貴重だろう。しかし、今や20万発とも言われるミサイルやロケット弾をイスラエルに空爆されたら、との不安も残る。

イスラエルは、7月にヒズボラの司令官をピンポイントで殺害。ナスラ師がポケベルへの移行を指示したのを受け、ブルガリアやハンガリーのダミー会社を通し、おそらくは「古い機種だから、安く売る」とでも持ちかけ、3000台以上のポケベルがヒズボラ

戦闘員の手に渡るよう工作を成功させた。それだけ時間をかけて準備をしてきたイスラエルが停戦に応じるだろうか？ヒズボラがいる限り、イスラエル北部の人々は安心して元住んでいた地域に戻れない。ハマスの奇襲を許した情報部への不信は今も残るからだ。しかし、ヒズボラとの戦争を続けるなら、ハマス、イエメンのフーシ、イランの武器供給を受けるイラクとシリアのシリア派組織という多正面の戦争を覚悟しなければならぬ。それでもイスラエルが思い止まるかは疑問だ。どれ程敵が大きくても徹底して戦い抜く事がこれまでイスラエルの「抑止力」として機能してきたのだから。

### 米国に対し敵意を持っていない

10月1日、イスラエルはレバノン国境で地上侵攻を開始した。「ヒズボラのテロ目標やインフラを標的にした『限定的』な攻撃」で、6万のイスラエル住民を家に帰す為、という。2006年、捕虜奪還を目的として始まったレバノン侵攻は当初の計画、空爆では収まらず、地上戦にもつれ込んだ。結果、イスラエルは

100人以上の戦死者を出し、捕虜も奪還できず、ヒズボラの拠点や地下施設を完全に破壊できないまま撤退を余儀なくされた。しかし、当時に比べ、イスラエルははるかに多くの情報を持つている。BBCは、イスラエルは当時やり残した事を今、やるつもり、と見ている。司令塔を失ったヒズボラの殲滅・拠点の一掃

イスラエルは国境地帯を帯状に占領し緩衝地帯にしたいと考えている。これは非常に危険な賭けだ。戦争は常に拡大の可能性を秘める。拡大すれば、双方に膨大に犠牲者が出る。ネタニヤフは「中東の力関係を変えろ」事にも言及した。

注目されるのがイランの出方だ。イスラエルは、10月1日イランの革命防衛隊が約180発の弾道ミサイルを発射と発表。テルアビブなどで空襲警報が鳴り避難指示が出されたが大半が撃墜された。これは4月のイランのイスラエル攻撃を彷彿させる。司令官ら13人が殺害され、復讐を誓ったイランはイスラエルに中距離弾道ミサイル百発以上、巡航ミサイル30発以上、攻撃型ドローン約170機を発射。しかし、イスラエ

ルの防空網と米・英の援護で、その99%が迎撃された。圧倒的な数字だ。この時アメリカは空母2隻と駆逐艦を派遣。イスラエルを守る強い意志を見せつけた。

イランでは穏健派の大統領が選出され、記者会見で「我々は米国に対し敵意を持っていない。米国とも話ができる」と経済制裁解除を求める姿勢を示したばかり。社会の不安定化・経済の困窮に喘ぐイランは直接的な戦闘に参加するのは避けたい。

しかし、ハマスに加え、ヒズボラもフーシも見捨てたとなればイランの信用は失墜する。苦肉の策で、イランは攻撃を実行したが、本気でエスカレートを望んではいないので、というのが筆者の個人的見方だ。その証拠に、今回もイスラエルに大きな被害はない。

万一、イランが本格的に介入すれば、中東は大混乱に陥る。その先は、誰にも予測できないカオスの世界になりうるのだ。多くの死者が出、原油はじめ、多くの物の値段が高騰する。あらゆる国が止めようとするだろう。今はその努力が実る事を祈るしかない。